

辻 哲也(編)

高倉保幸, 高島千敬, 安藤牧子(編集協力)

《標準理学療法学・作業療法学・言語聴覚障害学 別巻》

がんのリハビリテーション

評者 中村春基

日本作業療法士協会

「がんのリハビリテーション」の入門書が、辻哲也氏ご編集のもと医学書院から発刊された。本書の序で辻氏は、わが国では、国民の2人に1人は生涯のうちにがんに罹患し3人に1人はがんで死亡する一方、がん経験者(サバイバー)は現在の約500万人から、今後、1年で60万人ずつ増え、「不治の病」であった時代から「がんと共存」する時代になったと述べている。国を挙げてがん対策が進められているゆえんであり、そこにはリハビリテーションの必要性があると思う。続いて辻氏は、「がんのリハビリテーション」には、がん医療全般の知識が必要とされると同時に、周術期、化学療法・放射線療法中・後の対応、骨転移、摂食嚥下障害、コミュニケーション障害、リンパ浮腫、緩和ケア、心のケアなど高度な専門性が要求されることを示し、高い専門知識と多職種協働の必要性を説いている。このようにがんのリハビリテーションが必要とされる現在にあって、わが国においては「がんのリハビリテーション」を学ぶための実践的な入門書がほとんどなかった。

本書は入門書として、EBMに配慮しつつ、執筆者の豊富な臨床経験から培われた内容が盛り込まれており、多職種協働を前提として、がんのリハビリテーションに関する基本的な医学的知識、各専門職の取り組みを具体的に紹介した内容となっている。学生においては臨床実習前に、また、臨床においては、がん患者と接する前にまず読むべき本であるといえる。

全体は7章からなる。第1章のがんのリハビリテーション概論に始まり、第2章からは、周術期リハビリテーション、化学療法・放射線療法、摂食嚥下障害、リンパ浮腫、と疾患や病態ごとに治療とリハビリテーションの実際について述べており、第6章では緩和ケアが主体となる時期、第7章では心の

ケアとリハビリテーションまでもを取り上げている。

全体を通して、基本的な内容とともに図表の用い方が的確で実面的を射ており、紹介されている評価やプログラムは各職種間の共通事項として活用できると思う。加えて、乳がんや脳腫瘍、頸部リンパ節郭清術など要所要所の項目に症例とそのポイントが紹介されており、本文の理解と各章間の知識の統合を助けている。各節の冒頭には、「Essence」として、その節の概要が示され、また、巻末のCheck Sheetでは、章ごとに重要ポイントについての中抜き問題が設けられており、読者自身により理解の度合いを確認できるようになっている。

本書の読者への配慮をあと2つ紹介したい。1つ目は、Advanced Studyである。「最大心拍数を予測するGellishの式」、「1日1万歩の根拠」など15項目を取り上げ、理解を深められるようになっている。2つ目がTopicsであり、「ICU-AW」、「ICU-ASD」、「CRF」、「嗅覚リハビリテーション」など、近年の治療や制度など17項目について解説し、理解の幅を広げられるようになっている。

冒頭に述べたようにがんのリハビリテーションは国策である。ぜひとも多くの養成校で活用されることを願っている。また、臨床においては、本書ががん医療の質の向上に貢献し、がん患者のQOL向上の一助となることを祈念している。

B5版・272頁
定価：本体4,000円＋税
医学書院刊、2018年